

過労死ゼロ読書感想文⑤

「企業にはびこる名ばかり産業医」を読んで

本書は、休職者やそれに陥りそうな人を守り、より健康にすることが求められる「産業医」に焦点をあてて書かれたものである。しかし、そのような「産業医」を活用して、「従業員のメンタルヘルス面談や健康管理に力を入れている」、「理想的なケースは日本の560万件の全事業所のうち、1%にも満たない状況」であると本書の冒頭に述べられている。

このことから、産業医がその機能として上手く活用できていないことがわかる。どうして、鬱や過労死を防ぐために活用されるべき産業医がこのような状態に陥ってしまったのだろうか。

本書では、それについて理由を様々に述べているが、私の印象に残ったのは次の2つである。

1つ目に、産業医が開業医や勤務医を兼ねており、「本業が多忙な中、各事務所を知る時間やメンタルヘルス対応などの勉強・研修時間を確保できず、結果的に企業に対して効果的なアプローチをとれないまま、産業医としての活動を諦めてしまう医師もい」と述べられている。また、産業医の専門分野が内科の医者が6割、外科が2割弱、精神科・心療内科医は、たったの0.5割（=5%）という悲惨な状態だということも述べられていた。

一体このような状態で、どうやって職場のメンタルヘルスを行なっていくことができるのだろうか。

2つ目に、産業医の資格の取得に対する簡易さに課題があると述べられている。

産業医の資格は、50時間の座学だけで手に入るものであり、これは資格を持っていることは、産業医の切符を手にしたにすぎず、専門家になるためには、さらにプラスアルファでスキルや知識を磨いていく必要がある。しかも、そのスキルや知識は、労働所の実態であったり、カウンセリングであったり、社会保障であったりと、本職の医療の知識より幅ひろく必要である。しかし、それだけのスキルや知識を磨いてクライアントの経営している会社と考えが合わないと実態が変わらず、産業医としてのやりがいを持ってないという状況がある。